

文語の苑

メールマガジン第三十二号（平成二十六年二月）

不可視世界の謎

先に述べたるが如く古代人は、世界には見ゆる部分と見えざる部分とありて見えざる部分の象徴たる神こそ全体の主なりとせり。されば見ゆる部分に属する人間も全体の支配者たる神の意思に従はざるべからず。この宇宙観は東西を問はず広く支持せられたり。然るに近代に至り、見ゆる部分の観察に基礎を置く自然科学興り驚異的なる成功を見るに及び、見ゆる部分こそ世界の全てにして見えざるものは非存在として扱ふこと可なりとする見解生ず。ここに見ゆ、見えずとは表象的謂ひにして観察の可否を意味す。観察は五感中にも優れて視覚に依存するものなればかかる表現を用ゐるなり。現象の観察を装置、論理操作によりて補ふ技術の進歩によりてこの見解は人心を捉へぬ。望遠鏡、顕微鏡、高速度撮影、電磁技術などの発達はそれまで謎とせられしもののヴェールを次々に剥ぎ取りぬ。科学は見ゆるものをその対象と為すものなれば見えざるものの存在を云々するは非科学的となす考へは今や主流と言ふべし。衰へたりとはいへ未だキリスト教の影響強き欧米は兎も角、わが国においては知識人の圧倒的多数はかかる考へを有す。

かかる立場に立つ人はその有する説明体系にて説明すること能はざる現象はその存在自体を否定す。気のエネルギーもその一例なり。このエネルギーを用ゐてスプーンを曲ぐることは事実可能なれど彼らは頑なにこれを認めず。自己の説明体系に合はざればなり。野外授業にて「先生、あの鳥間違ってる」と訴ふる生徒あり。根拠は図鑑に見出すこと得ざる故なり。スプーン曲げを否認する人はこの小学生と何等変るところなし。

仏道修行は言葉を変ふれば見えざる世界に分け入ることなり。所謂科学的なる人々の真つ向から否定する次元に分け入ることなり。単にかかる次元を認知するに留まらず、更に進んで操作することすら含む。

昨今の宇宙物理学の発展により、宇宙の万有引力の法則に従はざること判明せり。唯一可能なる説明は観測不能即ち不可視の存在を仮定することと言ふ。その存在たるや実に全宇宙の八十七パーセントに及ぶ。この存在を名づけて暗黒物質と為す。この暗黒物質、現代科学の最大の謎の一なり。

思ふに仏道修行を究めたる者、暗黒物質の探求に必ずや大なる貢献をなすべし。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第三十二号

小倉百人一首 小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければ まだふみも見ず天の橋立

小式部内侍は、前に書きました通り、和泉式部の娘です。母の最初の結婚で生れた子で、母が離婚したときは、何歳になってゐ(い)たでせ(しよ)うか。母の男性遍歴を子供ながらに見て、その煽りも食らってゐ(い)たでせ(しよ)う。宮仕へ(え)ができる年齢になると、母とともに中宮彰子に仕へ(え)ます。小式部の名は、和泉式部から来て居ります。まだ若いうちから、母譲りの歌の才が世に持て囃されました。美人でもあったのでせ(しよ)う。若い小式部の周りに名門の子弟たちが犇めきます。この歌を詠んだとき、母の和泉式部は、再婚の夫、丹後守の藤原保昌に同行して夫の任地に赴き、小式部は一人で、内侍として宮仕へ(え)をして居りました。近く舉行される歌合せに、小式部は歌の詠み手として出るようになってゐ(い)ます。

そんなある日、藤原道長に近い、今を時めく「四納言」の一人、大納言藤原公任の息子の藤原定頼が、小式部の詰める局(つぼね)にやって来ました。小式部に向って「歌合せの歌はどうなさいますか。お母様の居られる丹後の國に使ひ(い)を派遣されましたか。その使ひ(い)はまだ歸って参りませんか。さぞかし心細く思っておいででせ(しよ)う」などと、からかひ(い)半分に問ひ(い)掛けて、立ち去ら(ろ)うとします。つまり小式部の歌は、どうせ母親が詠んだり手を入れたりして居るに相違ないと極め付けて、母親のところへ派遣した人がまだ戻って来ないので心配でせ(しよ)う、とからかった譯です。すると小式部は向き直り、行か(こ)うとする定頼を引止めて、この歌を詠みます。

歌の意味は、「丹後の大江山へ行く生野の道は遠いので、天の橋立にはまだ行ったことがありませんし、母からの手紙もまだ見て居りません」です。定頼のからかひ(い)半分の問ひ(い)掛けに對して小式部は、「自分の歌は自分で詠み、母からの助けを求めたり、手紙で問合せをしたりして居る譯ではありません」と答へ(え)ます。この小式部の當意即妙の歌は、宮廷中の評判となりました。はっきりとした受け答へ(え)とともに、大江山と天の橋立といふ(う)丹後の名所を讀み込んだことが、印象を深くします。

小式部は、母の和泉式部とは少し違った流儀で、やはり自由奔放な戀愛生活を送った女性です。藤原道長の子の一人と愛人関係になって居たところに、道長の正嫡の次男で、後の關白藤原教通が通って來ます。そして教通の一子を生みます。この教通と小式部が一緒に居るところへ、上の藤原定頼が忍んで來て、鉢合せをした話がありますから、定頼も愛人の一人だったのでせ(しよ)う。更に當時の一流の公達何人かを、手當り次第といった具合に愛人にします。その内の一人の子を産み、産褥で世を去ります。まだ若く、二十代の半ばだったや(よ)うです。小式部の短い一生を見ると、子供の時から奔放な母に振廻されながら、母ほどの生命力が無く、若死にする哀れを感じます。

母の和泉式部は、二人の愛人を失った後、娘にも先立たれます。業の深さでせ(しよ)う。娘を失った哀傷歌を数多く詠みます。次の歌は、孫たちを見て、自分が子に先立たれて悲しいや(よ)うに、故人には残した子供たちが心配だら(ろ)うと詠ひ(い)ます。

とどめおきて誰を哀れと思ふらむ 子はまさりけり子はまさるらむ

文語の苑

メールマガジン第三十二号

遠つ祖とほつそ 愛國百人一首を讀む

遠つ祖とほつその身みによるひたる緋緘ひをどしの面影おもかげ浮うぶ木々きぎのもみぢ葉は

蒲生君平がまふくんへい

見事な紅葉に包まれた木々のたゞずまひは、自分の遠祖である蒲生氏郷が緋緘の鎧を纏うて戦國時代を戦ひ抜いて、奥羽百二十萬石を領するに至つた晴姿を見るやうであるよ

蒲生君平は祖母から蒲生氏郷の裔すゑであると聞かされて、それまでの「福田」から「蒲生」に改姓したと言はれます。氏郷と君平との時代差は約二百年、それほど長くはありませんが、祖母から聞いた祖先のことに大きな感銘を受けたことが「遠つ祖」の一句に籠められてゐます。更にその祖先が着用したであらう緋色の緘をどしからもみぢの紅くれなゐへと聯想が廣がつて行き、さうして遂には祖先崇拜の念と紅葉を賞でる感覺とが融合して歌が終つてゐます。

先帝陛下昭和天皇の御製

遠つおやのいつき給へるかずかずの正倉院のたからをみたり

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅行く

にもそれぞれ奈良時代及び肇國の皇祖への御思おんおもひを拜察することが出来ます。

今日の私達も遠つ祖の語には悠久の歴史を溯つた祖先を感じて、その恩恵に感謝の思ひを致すのではないでせうか。祖先崇拜といふこと、かつては人類共通の感情でありました。近年に至り、祖先の恩恵が財産といふ經濟的な側面を強調されるに伴ひ、之を不當とする思想が世界的に廣がり、多くの國や地域で祖先崇拜が亡びました。日本でも益には祖先の靈を御迎へする習俗が未だ健在とはいへ、この思想の影響が及びつゝあるのも事實です。祖先への感謝崇拜を本當になくして良いのか、私達の世代に結論が迫られてゐます。

蒲生君平の遠つ祖への思ひは全國にある天皇、皇后のみさゝぎ、即ち山陵を實地調査し、その結果は「山陵志」といふ書物に結實します。内容は極めて正確で資料的價値が高いと同時に、それらの山陵の荒廢が進んでゐることを訴へた憂國の文書でもありました。惜しいかな幕府の取上げることにはなりませんでしたが、尊皇の思想を弘める上で大きな役割を果しました。餘談ながら、我が國古墳の形状として、前側が四角つまり「方形」、後側が「圓形」のものを「前方後圓」墳と言ひますが、この語は「山陵志」が初出とされます。

君平のこのやうな憂國の情は、ロシア軍艦の出現に危機感を覚え、北邊の守りを提唱する「不恤緯ふしつゐ」の刊行となります。題名にある緯は横絲、恤緯は機織はたおりが横絲の少いことを憂ふことから轉じて、我が身を憂ひて他人を憂ふる餘裕がないことを意味し、これに「不」を冠して我が身を憂へず、國を憂ふる書といふ意味になります。折角の提言は卻つて幕府の疑惑を招き身の危険にさへ曝されました。

文語の苑

メールマガジン第三十二号

平成になつてから、文藝春秋が発掘した、昭和天皇の最後の文語詔書は、昭和二十三年頃に宮内庁長官が先帝の御意志を承けて書いたものであらうと推定されてゐます。

スペースの関係で、説明は省略しますが、原文を転載し、その後に、英語の私訳をつけてみました。

朕即位以来茲に二十有餘年、夙夜祖宗と萬姓とに背かんことを恐れ、自ら之れ勉めたれども、勢の趨く所能く支ふるなく、先に善隣の誼を失ひ延て事を列強と構へ遂に悲痛なる敗戦に終り、惨苛今日の甚しきに至る。屍を戰場に暴し、命を職域に致したるもの算なく、思ふて其人及其遺族に及ぶ時寔に「ちゅうだつ」「ちゅう」は「りっしんべん」に中、「だつ」は「りっしんべんに日」の情禁ずる能はず。戦傷を負ひ戦災を被り或は身を異域に留められ、産を外地に失ひたるもの亦數ふべからず、剩へ一般産業の不振、諸價の昂騰、衣食住の急迫等による億兆塗炭の困苦は誠に國家未曾有の災殃といふべく、靜に之を念ふ時憂心灼くが如し。朕の不徳なる、深く天下に愧づ。身九重に在るも自ら安からず、心を萬姓の上に置き負荷の重きに惑ふ。

然りと雖も方今、希有の世變に際會し天下猶騷然たり 身を正しうし己を潔くするに急にして國家百年の憂を忘れ一日の安きを偷むが如きは眞に躬を責むる所以にあらず。之を内外各般の情勢に稽へ敢て挺身時艱に當り、徳を修めて禍を嫁し、善を行つて殃を攘ひ、誓つて國運の再建、國民の康福に寄與し以て祖宗及萬姓に謝せんとす。全國民亦朕の意を諒とし中外の形勢を察し同心協力各其天職を盡し以て非常の時局を克服し國威を恢弘せんことを庶幾ふ。

文語の苑

メールマガジン第三十一号

It was more than 20 years ago that I succeeded to the throne. Since then I have made efforts day and night to live up to the instructions of the imperial ancestors and the expectations of my subjects. As it was, we had difficulty catching up with the current of the times, so that it wasn't long before losing good friendship with the international society until at last our country had no choice but to go to war against the World Powers. The result was that we were defeated beyond recognition and the motherland has been reduced to ashes. Those who fell in action were without numbers and so were those killed by bombardment while working at their own posts. Thinking of them and their bereaved, I am beside myself with agony. Of course, countless people were wounded or had their houses burnt down. Many were imprisoned in some foreign countries, quite a few of whom have not returned yet. Also, there are many who have lost their livelihood. In addition, the industry in general is in bad condition. Prices are rising high. The necessities of life are running short. It is not too much to say that the people are suffering the direst distress that we have ever experienced. The more thought I give to these misfortunes of ours, the more regretful I cannot help but feel. I blush to the thought of my having lacked virtue bringing about this disaster. Although living deep in the recesses of the palace, yet I am ill at ease, at a loss how to help my subjects to overcome their difficulties and how to shoulder the responsibility.

Even so, we are now in the midst of an unprecedented political and economic turmoil. It is true I have been thinking of stepping down from the throne by way of an apology, but I believe such would not add up to holding myself responsible. Taking account of the general drift of affairs at home and abroad, shouldn't I make every effort to stand up to the problems the nation is faced with? I am determined to turn this misfortune into a blessing by practicing virtue and by doing good. Thus I could contribute to rebuilding the country and promoting the happiness of the people, and by doing so, I might be able to show my face to my ancestors and subjects. I wish you, my people, would embrace my feelings and understand the way things are proceeding in our country and in the world. All of my subjects should cooperate with each other by carrying out your own duties to overcome the ordeal the heaven has imposed on us. It is such efforts and patience that will make possible the recovery of our national glory.

徳田友

文語の苑

メールマガジン第三十二号

巴里の星無しレストラン(二)

LE 30 (トラント)

八区。マドレーヌ広場を眺むる好立地にして、有名食品店フォションによる経営なり。食前酒をピアノバーにて注文し得る方式は珍しく、最近仏蘭西人の間に人気出始むるも、むべなる哉。

OLSSON'S (オルソンズ)

十六区。意外なる掘り出し物。北欧バイキング料理なれど、料理の種類が多さに至りては、かの瑞典ストックホルムの名店、オペラシエラーレンにも匹敵す。鮭、魚の卵の質は流石に本場には及ばずと言へども、温かき料理は格別に素晴らしく、寧ろ上と覚ゆ。内装も麗しく、多人数のディナーに向く。

CHEZ QUINSON (シェ・カンソン)

十五区。安価なるブイヤベースを食するならばこの店も候補の一。伝統の味とこそいふべけれ。

BERNARD CHIRENT (ベルナル・シラン)

一区。値段の安き定食あり。メニューの薄汚れたる状況より察するに、永く値上げせざりし雰囲気と見受けたり。

PAVILLON MONTSOURIS (パヴィヨン・モンスーリ)

十四区。モンスーリ公園に面し、天気晴朗加はらば気分更に爽快なり。良心的なる定食ありて、鴨の浅塩漬けなど印象に残る。

VERO DODAT (ヴェロドダ)

一区。巴里を代表する美しきアーケード、ギャラリー・ヴェロドダにある店。味よりも雰囲気を楽しむべし。最近一二九フランの定食を始むるはうれし。(従来はアラカルトのみなりき。)

LE TRAIN BLEU (トラン・ブルー)

十二区。リヨン駅構内の有名レストランなり。一九〇一年に開業。ベルエポックの粹を集め、その豪華なる内装の美しさは想像を絶するほどなり。

BISTRO 121 (ビストロ・サンヴァンテアン)

一五区。ジビエ(狩猟によりて、食材として捕獲せられたる野生の鳥獣)の有名なる店なり。特に十月より十二月ごろの兔の料理、ロワイヤル・ド・リエーヴルは格別なりき。

ARMAND AU PALAIS ROYAL (アルマン・オー・パレロワイヤル)

一区。シェフはかのヴィヴァロワにて修業せり。

REGAIN (ルガン)

昔風の味にて重し。若き料理人ら、此處のシェフにソースの造り方をば習ひに来る由。

LE CHALET DES ILES (シャレ・デ・ジル)

十六区。島の中にあり、往復5・5フランの渡し船に乗る。味は二の次、気分は格別。コップ幾分徴臭けれど場所柄已む無し。

文語の苑

メールマガジン第三十二号

BONNE FOURCHETTE (ボンヌ・フルシエット)

一区。入口はサントノレ通りより少し奥まりたるところにあり、隠れ家的なる雰囲気あり。マダムを経営良心的なる店なり。

ANDROUET (アンドルーエ)

八区。チーズ専門店なれど、チーズ料理ばかりを食するは辛し。総じてチーズは、かかる店よりは、二つ星、三つ星レストランの方が独自の流通ルートも確立しをれば、遙かに美味と覚ゆる次第。

VELLONIE (ヴェローニ)

一区。フィガロ・スコープ紙、巴里にて一番得点の高き伊太利料理店として位置づく。唐辛子入りのスパゲッティ・ディアブルは旨し。

BICE (ビーチェ)

八区。ミラノにも支店のある本格的なる伊太利料理店として一目置くべし。

LA MEDITERRANEE (ラ・メディテラネ)

六区。昔ジャン・コクトーら有名人の通ひたる名店なり。今は名残りを僅かに留めたるのみなれど、コクトーの絵入りの皿を土産にと購入し得るは嬉し。

土屋博

文語の苑

メールマガジン第三十二号

フィットネスクラブで発電を

細川元首相東京都知事選に立候補を表明し原子力発電の是非、選挙争点にならむとす。原子力発電如何にすべきやに諸説あれども我には何れも難解にして判断能はず。假に「トイレ無きマンション」なる言ひ様が相應ならば早急に対策あることを願ふのみ。

代替手段として風力発電太陽発電その他に關はる論議、一時喧しけれど近頃その勢、失せたる感あり。ここに我、些かなれども未利用の発電資源提唱したし。フィットネスクラブの活用、これなり。

試みに一クラブを覗けば、運動に汗掻く人いかに多きかを知る。週日の晝間は勤めを卒へたる老人が大半なり。重き物を且つは持上げ且つは引張り、車輪無き自轉車に負荷を懸けて漕ぎ、電動ゴムの床を只管歩き時に走る。

かかる行為、いかに精魂を込めてなすとも、何物をも生産せず。單に減量の爲の体内エネルギー消費と、筋肉増強を期して鍛ふる負荷運動にして非生産的無償の行為に他ならず。否、施設利用に費用掛かる有料の行為なり。誰か有能の人ありて、この運動を利用して電氣を起す装置を工夫せばその効果大なるにあらずや。

物を反覆して持上ぐる行為、引張る行為、いずれも電氣に轉化するは容易ならむ。対象の物、重くは重きほど運動の効果あり、産出する電氣量も亦多かるべし。他方、歩行用機械は英語のトレッドミル、正確には歩行粉挽機と譯すべき語にして、その力を物の役に立つるは元來の趣旨なり。故に、発電の要に供する是れ利用者の抵抗頗る尠かるべし。

今、運動用トレッドミルには夫々テレビ畫面附屬し、それを見つつ使用するが常なり。即ち、汗掻く人體内エネルギーに加ふるにテレビ用電力エネルギーの二つながら、同時に消費するは勿體なしと言ふべし。願はくば新機械考案され、少くもそのテレビが喰ふ電氣は運動者自ら生ぜしめむを。

かかる新機械出づれば、それを設置するフィットネスクラブは、運動する満足に加へ資源高騰枯渴問題にも寄與するの充足感をも提供し得べし。多くの老人、退職後も社會に貢獻したき志あれば、いづれ何處のクラブも新機械置かざるべからず。それが普及、全國津々浦々に及ぶ日も遠からず來るべし。これ名案と思ふが如何か。

兒玉稔

文語の苑

メールマガジン第三十二号

文語で書く

文語の苑に入会し文語を習うということを、当初どのように思っていたか自分のことながら思い出せない。ひよっとしたら古文書を読めるようになるぐらいに思っていたのかも知れない。カルチャーセンターで源氏物語を読むことと、何か違いを述べることができたかどうか、はなはだ疑わしい。それでも身につけるべき素養のひとつとして、定年を視野に入れた年頃になって文語を学んでみたいと思ったことと根底にあったのは、高校時代に味わった漢文読み下し文の歯切れの良さではなかったか。

文語の苑では、文語文を読むことを通じて文語に親しむのは当然のこととして、活動の中核にあるものは文語で書くことの奨励であった。これは難儀なことではあった。さらに旧仮名遣いが二重の困難をもたらし、こちらに気を取られるとあちらが疎かになるという風であった。今日なお文語で文章を書けば身構えることこの上ないばかりか、先達に添削を依頼すれば真っ赤になって戻ってくる日々である。

そのような未熟さゆえに、いつになればそこその程度で文語文を書けるようになるのか、日暮れ道遠のような気分になるのも当然の成り行きであったが、不思議なことも起きた。文語で何かを書くこととしていた間は、得も言われぬ世界に身を置くような感覚に捉われるのである。これは文語文を書き始めて遠くない時期に感じるようになり、何か月に一度の頻度でしか書かないにも係らず、そのような感覚はその度ごとに強くなっていったのである。もちろん、書いている間だけのことである。

このぼんやりとした感覚は、それまでに経験がなく、実生活とはかけ離れているので何にも喩えようがなかったのだが、時を過ごすともにくらかずつその正体が明らかになってきた。これはこの国に長きに亘って連綿と続く、時空を越えて人と人とを結びつける世界があり、文語文を書くということはそのような世界と波長を合わせることであり、その内側に自らを置くことであると理解した。そこには紫式部が居れば樋口一葉も住んでいるように思うのである。さらにはそれが今途絶えようとしているようにも思うのである。

文語の苑

メールマガジン第三十二号

愛車

子供の頃より活発かつおてんばなりし吾は、東京在住中高き木によち登り、枝を伝ひて屋根にあがり、両親やら祖母などにしばしば叱られたり。海外においては車好きの父、吾に車の種類記憶せさせたり。パリにおいて、我がおもちやは人形やままこと道具ならずして、ガソリンスタンドや消防署の模型など、およそ女の子らしからぬもの多し。

ワシントンにて父は二年に一度、二台の車を交互に買い替へたり。十六歳にて免許を取りし吾にいづれの車にか乗らんと欲すると問ふ。その当時ジェームズ・ボンドの「ゴールドフィンガー」なる映画上映せられ、例により、多様な装置を駆使し、主人公重宝したるムスタングなる車登場してあり。冗談にムスタングが所望と父に伝へし数日後、学校より帰宅したるに銀色のムスタング我が家の駐車場に留まれり。我が家にては三台目の車なりき。父は自分の車を一年前に銀色のサンダーバードから英国車のジャガーに買い替へてをり、母はダットサン（現日産）の初代フェアレディーを運転せり。この頃より吾は一人でドライブするを好み、いささかもスピード狂ならねど、床に植ゑたる五段シフトにて、エンジンブレーキの可能なるマニュアル車を愛でたり。

初任給にて吾は、富士重工のスパル千百なるエンジンの轟音耐へ難き前輪駆動の車を購入、その後いすずのベレットGT、日産のブルーバード二〇〇〇GT-Xなどスポーツタイプの車多し。吾にとり初めての外車は深紅のベンツなり。車のディーラー曰く、大いに値引きせん、と。かく強ひられて買ひたるは、真つ赤な車になりたるが、我は以後、赤き車を求むることなかりき。そは色々笑ひ話しになり、不便を被る破目になりたる故なり。

まず、葬式には不適切なる車なり。黒装束にて赤き車に乗りたればヤクザの姉御と間違へられたり。當時は朝日新聞社に勤務し頃の事なり。ある人の葬義に参列するため、国道二四六を走行中、知り合ひの車信号にて隣に停車せり。運転席の扉を開け、相手の窓をノックし、吾道良く分からずして、案内を依頼せり。そを見し後続の車の仲間、ヤクザの姐御にイチャモン付けられし気の毒なる仲間を助けに行かんと話す間に、二台の車走り去りされりとの噂にて、翌日社内で大いに笑ひ話となりたるの〇魔りき。話は続く。葬儀場に到着し、駐車して葬儀に参列したりし後、親友と帰ろうとせしところ、一方通行にて何と長蛇の人の列の前を深紅の車にて通る破目になりき。親友と吾は顔上げるのも恥づかしく、伏し目にてゆつくりと前進せり。親友曰く、「赤き車にて葬式に行くは憚からる。」以後、我が愛車はメタリック・ブルーに落ち着けり。現在は四台目のブルー車にて、汚れ目立つこと少なく、つねに美しく映ゆるがゆゑと申さんか。

赤谷慶子

文語の苑

メールマガジン第三十二号

夢

明恵上人の夢記とは比較にならずと雖も、余、時折夢の記録を試み約五年を経過せり。ノートを讀み返すに奇妙なる記事多し。曰く、「京福電車、新幹線を牽引す」、「テナント内にてのパーティにエリザベス女王現る」、「硫黄島に勤務、觀測業務に當る」、「氣功の稽古中に竹蜻蛉飛ばせし人あり。余も飛ばし返す」、「瞑想状態を見るモニターの發明あり」ニ云々。

兄の會社の移轉せる夢を見き。其二年後には實際に引越あり。豫知夢なりや。

意味有り氣なれども意味不明の物多し。「臺灣人の友人と食事す。他に女性有り。蟻の數甚だし。友人の臺灣より連れ來し物ならん。自宅より來たるとはよもや思はず」と女性云ひたり。「蟻、何を象徴せりや。

空中に浮揚す。體全体痺れたり。兩手にて氣のボール作れり。半ば目覚めたる状態にて、「後一步にて體外離脱なり」とぞ思へる。

足重くして歩く事能はず。兩手にて地面を引掻きて進めり。これ屡見る夢なり。

スキーの夢時折見るなり。スキーを履かずして靴或は裸足にて滑走するも有り。

山中を歩く夢有り。夢の中には馴染の場所なり。されど實際には心當無し。

英語辞書引く夢屡見ぬ。當該單語如何な見當らず、其の内「是は夢なり」と氣附きけり。「夢の中の辞書なれば正しからむ筈も無し」と思へり。單語見出したる場合も意味綴り等記憶せず。知らぬ單語を夢に辞書を引きて、意味も正しからば甚だ面白き事なれど、斯かる事例未だ記憶せず。

腹立たしき事著し。憤懣遣る方無し。心拍數増加し顔面紅潮す。されど程無く是は夢なりと氣附きけり。「あゝ夢なりや。夢なれば斯なる腹立ち實に虚しく無意味なり。」現実の立腹も夢の立腹と然したる相違或は無きやも知れず。腹立つる事の虚しさ夢に教授せらる。

仲紀久郎